

に出してうかゞはせた。

女は梅干と奈良漬を、近所の家から貰つて來たりした。

猫はニヤゴニヤゴと、不吉なうるみ聲をして泣いた。

女は着物を着替えて、晝夜帯を胸高に、キツクキツク巻き締めてゐた。

覺悟を決めたものゝ如く。佛壇の燈明を吹き消して、羽織の紐を結んでゐる。

僕は冷くなつたコテを以ても、木刀の漏斗を叩いたのだ。

痕が付いて、もう役に立たないかも知れない、それを火鉢の灰に埋めた。

僕は太股の傷あとも女に見せた。

悲壯は滑稽を伴ふものだ。

提灯を持つた女を先に、忍びやかに表を板戸にして、山を這ひ降りた。

道は乾いてカンカンになつて、打下ろす漏斗の音色を爽やかにする。

川底のドジョーも、火燧を欲しがつてゐたかも知れない。

僕は前彼左右に氣を配りながら、星から垂れ下つた糸にくゝられてあやつられるものゝ如く二